街のオアシス 再発見 第14回

星形の西洋式城郭　五稜郭公園（函館市）

森林インストラクター
小沢　信行（おざわ　のぶゆき）

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。著書に「こうしてできた北の銅像」。

五角形の星形をした函館市の五稜郭は日本初の西洋式城郭です。列強諸国の攻撃に備え1864年、海沿いにあった箱館奉行所の移転先として築造されました。

外国の侵攻はありませんでしたが、皮肉なことに明治維新の際、日本人同士が争う箱館戦争の舞台となりました。

1914年以降、サクラを植樹し公園として整備され1952年、国の特別史跡に指定されます。2010年には奉行所が復元され、江戸末期の雰囲気を漂わせています。

来訪を歓迎するフジ棚

南側の橋を渡り五稜郭へ入るには、フジ棚をくぐらなければなりません。５月下旬から６月上旬にかけ、頭上には花が咲き誇り、来訪者を歓迎してくれます。突き当りの土塁（どるい）の反対側などにもフジ棚が設けられています。

つる性木本（もくほん）で本州以南では、山林で木に巻き付いたり、高木（こうぼく）をよじ登ったりします。北海道には自生していません。

開花時には、蝶形の花がたくさん細長い房状になり枝先に垂れ下がります。枝がつる状で、花が垂れるという特性を生かしたのがフジ棚です。花の量感を間近で楽しむ園芸手法として親しまれてきました。

紫色の花は「万葉集」の時代から愛され、花が風で波打つ様子を「藤波」と表現していました。色も愛着をこめ「藤色」と呼んでいます。園芸品種も数多く開発され、花が白い種類も出回っています。

フジ棚は花期が過ぎると忘れ去られがちですが、秋にのぞいてみると、長いさや状の実を付けています。これがマメ科に属するゆえんです。

春はサクラが美しい五稜郭公園

人々の目を楽しませるフジ棚

光り輝く設計者の碑

フジ棚を抜け、突き当りを左に折れると見えてくるのが、五稜郭を設計した武田斐三郎の顕彰碑です。伊予国（現愛媛県）で生まれた斐三郎は勉学を志し、大坂の緒方洪庵塾や江戸の佐久間象山塾などに入ります。

斐三郎の向学心に火を付けたのは1853年。ペリー提督が米国の軍艦４隻を率いて浦賀に来航した時です。象山が視察に行くのに同行し、見聞録を書き表しました。

これが認められ幕府勤めとなります。翌年、北方の警備を担うため蝦夷地に派遣された折、ペリーの箱館来航を知り、米国側との折衝に当たりました。

その時の様子を米国側の通訳サミュエル･ウェルズ･ウィリアムズはこう回顧しています。「オランダ語の通訳武田斐三郎は、オランダ語が書けるだけで、会話はできないと二､三行清書して示した。彼は背が高く、私がこれまで会った日本人のうちでもっとも容姿の優れた一人であった」（「ペリー日本遠征随行記」講談社学術文庫）。

翌日、陸上での会談後、斐三郎ら役人３人は船舶の見学を申し出、黒船に乗船。「暗くなって何も見えなくなるまで艦に留まった。彼らからは、その好奇心もさることながら、学識の深さもかなりのものであることがうかがわれた。とりわけ武田はオランダ語に精通していたので、他の二人の入手しがたい情報の源泉が開かれていた」（同）と高く評価しています。

この体験が斐三郎を刺激し、独学で国内初の西洋式城郭を設計することになります。敵艦攻撃用の大砲を置く弁天岬台場の設計にも携わり、高等教育機関として箱館に設置された諸術調所の教授役も務めました。

顕彰碑は築城100年を記念し函館市教育委員会が建設。1964年12月１日に行われた除幕式で、斐三郎の曽孫夫妻が幕を引くと、上半身を描いたブロンズレリーフが現れました。

幅広い才能を発揮した斐三郎にあやかりたいと、いつからかレリーフの顔を触る人が増え、今ではそこだけが光り輝いています。

顔が光り輝く武田斐三郎のレリーフ

国内初の西洋式城郭

ペリーが来航した1854年、箱館は幕府の直轄地となり、港のそばに北辺警備や対外折衝をつかさどる奉行所が置かれました。しかし、外国軍艦の砲撃にさらされると危惧した箱館奉行は、郊外への移転を幕府に申請し、認められます。

そして築造されたのが五稜郭です。設計を任された斐三郎は1855年に来航したフランス軍艦から築城の知識を得ます。星形の城郭は、稜堡と呼ばれる５カ所の突き出し部分を設け、敵を見張るのに死角を生まない工夫を施しました。

工事は1857年から始まり、掘割と土塁の建設がすすめられましたが、土塁は冬の寒さで凍結し、ひび割れが発生、途中から土塁を石垣で覆う工法に転換しました。

1862年からは敷地内で奉行所の建設が始まります。マツ、スギなどの建築資材は東北地方で加工され、船で箱館に運ばれました。総面積３千平方㍍の奉行所が完成したのは1864年です。

タワーの展望台から望む五稜郭

砲撃を受けた奉行所

内陸に移転した奉行所は列強諸国の艦船から攻撃を受けることはありませんでしたが、箱館戦争の際、旧幕府軍が占拠したため、新政府軍の砲撃目標とされ、死傷者を出すことになります。

五稜郭は函館湾から最短で2.5㌔ほど。当初、これだけ離れていれば艦船からの砲撃は届かないとみられていましたが、西欧で開発する大砲の射程距離は年々、延びていました。

1869年５月12日に行われた新政府軍の箱館総攻撃で、旧幕府軍は五稜郭に置かれた大砲から海に向かって発砲しますが、砲弾は届きません。一方、新政府軍は米国から購入した軍艦「甲鉄」が大活躍し、射程距離の長い最新鋭の大砲が五稜郭を狙い撃ちします。

最初は五稜郭の外に着弾していましたが、次第に精度を増し、敷地内に落下し始めます。その標的が奉行所の太鼓櫓（たいこやぐら）と呼ばれる望楼でした。

戦争終結後の1869年７月には政府機関の開拓使が設置されましたが、奉行所はほとんど使われることなく1871年、開拓事業の本拠地が札幌へ移転するのに伴い、築７年で解体されました。

2010年に139年ぶりに復元された奉行所は全面積の３分の１ですが、入母屋（いりもや）造りの屋根の上には太鼓櫓が再現されています。

復元された箱館奉行所

武田斐三郎顕彰碑の右手奥には、箱館戦争で使われた大砲が２門展示されています。それぞれ新政府軍、旧幕府軍が五稜郭外で使用した外国製です。

箱館戦争で使われた大砲

変化した土方像

五稜郭タワーの１階アトリウムに土方歳三（ひじかたとしぞう）の銅像があります。新選組副長の土方は箱館総攻撃の際、新政府軍から銃撃を受け亡くなりました。

土方は死後「悪者」のイメージがありましたが、「その伝統的な土方像を一新したのが司馬遼太郎（しばりょうたろう）の『燃えよ剣』であった」（「新選組の遠景」集英社）と文芸評論家の野口武彦（のぐちたけひこ）さんは指摘します。

土方が主人公の小説「燃えよ剣」が週刊誌に連載されたのは1962年から1964年にかけて。土方は「日本最後の武士として、武士らしく死んだ。男として、やはり幸福な生涯だったといえる」（「司馬遼太郎が考えたこと２」新潮文庫）と司馬は書いています。

「最後に≪剣≫の人として箱館郊外の戦場に斃（たお）れる結末が、当時の読者にはたまらぬ≪男の美学≫だった」（「新選組の遠景」）のです。

こうした生き方に共感した一人が函館出身の彫刻家小寺真知子（こでらまちこ）さんでした。ローマを拠点に活動していた小寺さんは、土方の銅像作りを使命と感じ、構想を練り始めます。そんな折、五稜郭タワーから制作依頼が舞い込みました。

「侍の為の新しい国を作るのだという希望を持ちながら港を見下ろしている、そんな姿を表現したいと思いました」（「歴史街道」2004年３月号）と語っています。

2003年12月１日に立像の除幕式が行われましたが、小寺さんの土方への思いは尽きず、さらに座像、胸像も制作。座像はタワー展望台で公開され、非公開の胸像は社内で保管されています。

五稜郭タワー内にある土方歳三像

築造当時からのアカマツ

五稜郭内のアカマツは20㍍以上の高木です。五稜郭が築造された時に植栽されたもので、長い歴史を感じさせます。

マツは門松のように正月を「待つ」木として祝い事に用いるなど、日本の生活文化に定着しています。アカマツは樹皮が赤いことから名付けられました。樹脂を含み、火の付きが早く、燃えると高温になるため、薪（まき）は備前焼などの陶器づくりに役立っています。

築造当時、視界を遮ろうと堀の外にもアカマツがたくさん植えられました。しかし、街が広がるにつれ国有地は民間に売却され、立派に育ったマツ林はほとんどが姿を消しました。付近の松陰（まつかげ）町や松見通という町名や道路名が、かつてマツ林があったことをうかがわせています。

今では函館でアカマツといえば、「赤松街道」を連想する人が多いかもしれません。国道５号の函館市桔梗（きょう）町～七飯（ななえ）町峠下間には、1876年に植えられたアカマツ並木が残っています。1986年には「日本の道百選」に選ばれました。

歴史を感じさせる公園内のアカマツ